

人と食の未来をつなぐ

第1回大会

口から食べる幸せを守る会

in 横浜

7/13・14

主催：NPO法人「口から食べる幸せを守る会」
会場：横浜市開港記念会館
日時：2013年7月13日(土)
大会長：小山 珠美



ご挨拶

第1回大会 口から食べる幸せを守る会開催に寄せて

夏空がひときわまぶしく感じられる季節となりました。本日多くの皆様と一緒に本大会を開催できることを心より感謝申し上げます。

昨今の超高齢社会において、医学の進歩や福祉の充実により、私たちは長寿社会で生き永らえることができるようになりました。とはいえ、その一方で、本当に幸せなひと時を感じながら生命を委ねられる社会になっているのでしょうか？

「口から食べること」は生命を育む根幹であり、人間が幸せに生きるための基本的な権利です。しかし、現況の医療や福祉の現場では、口から食べたい願いが叶わず、点滴、胃ろうなどの経管栄養のみという方々が大勢いらっしゃいます。この窮状をなんとかかしたいという思いで、看護師として実務や啓発活動を行ってききましたが、救いの手を求めている患者さんやご家族への支援がまだまだ足りません。

そこで、NPO法人「口から食べる幸せを守る会」を有志で立ち上げ、直接的な医療活動を継続してだけでなく、幅広く社会貢献したいという考えに至りました。私たちは、口から食べることの大切さについての普及・啓発活動に加えて、よりクオリティーの高い食支援ができる人材育成を図っていこうと思っています。そして、保健・医療・福祉関係者、当事者・ご家族、行政、一般企業の方々と有機的なネットワーク構築を拡充し、「口から食べて幸せに暮らせる優しい社会」になるよう力を注ぎたいと考えています。

本大会にご参加いただいた皆様おひとりお一人の力が結集され、食べたいと願っている方々への光明となり、幸せをもたらす手助けができることを確信しています。そして、今日の日が「口から食べて幸せに生きる」ことができる未来への架け橋となることを祈念しています。

2013年7月13日
大会長 小山珠美



大会に参加される皆様へ

1. 受付について

2013年7月13日（土）午前9時20分から行います。

2. 事前に参加申し込みをされている方へ（事前に参加費納入されている方）

- ・「事前受付」に必ずお越しください。

3. 当日参加申し込みをされる方へ

- ・参加申込書をご記入のうえ、「当日受付」で大会参加費6000円をお支払いください。
- ・参加費と引き換えにネームカード、ホルダー、抄録集などをお渡しいたします。

4. ネームカード等について

- ・ご入場の際には、必ずネームホルダーを着用し、着席しましたらお名前等をご記入ください。大会終了後は、受付ボックスにてネームホルダーのご返却をお願い致します。

5. 手荷物の管理およびクロークについて

- ・お手荷物は各自で管理してください。会場内での紛失や盗難について本会では責任を負いかねますのでご了承ください。
- ・お手荷物が多くお困りの方は、1階4号室が「クローク」になっておりますのでスタッフにお申し出ください。（クロークでお預かりできる時間は9:20～17:00までです）

6. ご昼食・ご休憩等について

- ・講堂内では飲食禁止となっております。また館内での飲酒もできません。
- ・飲食は展示会場の1号室と6号室の休憩スペースのみ可能ですが、椅子の数に限りがございます。昼食は周辺施設のご利用をお願い致します。

7. 会場の利用にあたって

- ・会場施設内は全て禁煙です。携帯電話・スマートフォンのご使用もお控えください。
- ・2階7・8・9号室は他団体が使用し、廊下は共有スペースですので、他の来館者にご配慮ください。
- ・災害発生時は、各会場で避難のアナウンスがありますので、指示に従ってください。

8. 会場内での写真撮影や録音について

著作権とプライバシーの関係で禁止させていただきます。なお、本大会本部で許可を得た関係者や取材者は撮影を行います、ご理解・ご協力をお願い致します。

9. アンケート記入のご協力について

- ・本大会でのご意見・ご感想をいただき、今後の活動に反映したいと考えています。同封のアンケート用紙にご記入いただき、お帰りの際回収ボックスにご提出くださいますようお願い致します。

座長・演者・ポスター発表の皆様へ

1. 座長・演者の受付

- (1) 座長・演者の方は、該当セッションの開始 30 分前までに受付を行ってください。
- (2) パワーポイントで作成したデータは、9 時 30 分までに演者受付にご提出ください。

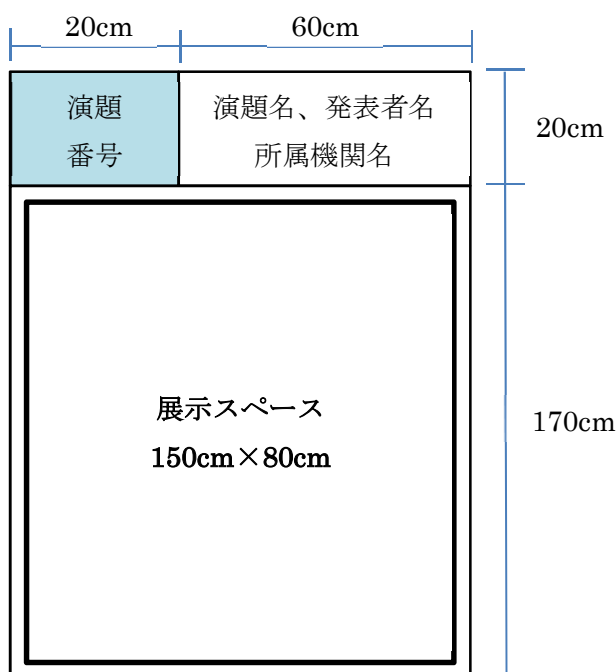
2. 口演発表について

- (1) 座長の方は担当セッションの開始 5 分前までに「次座長席」に演者の方は該当セッションの開始 5 分前までに「次演者席」にご着席ください。
- (2) 発表は 1 演題につき 15 分です。
座長の指示に従い、時間厳守でお願い致します。
- (3) 当日はパワーポイント (Windows Mac) の使用となります。
- (4) パソコンの持ち込みは可能ですが、時間短縮のため事前にデータをお預けくださいますようお願い致します。

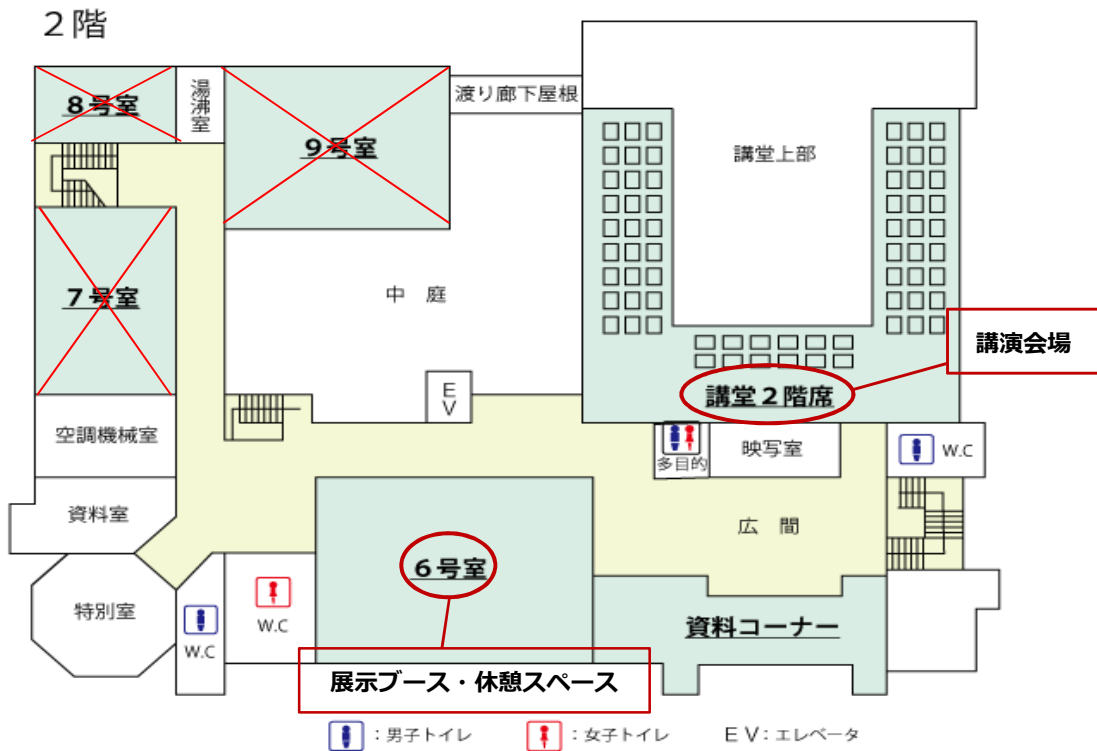
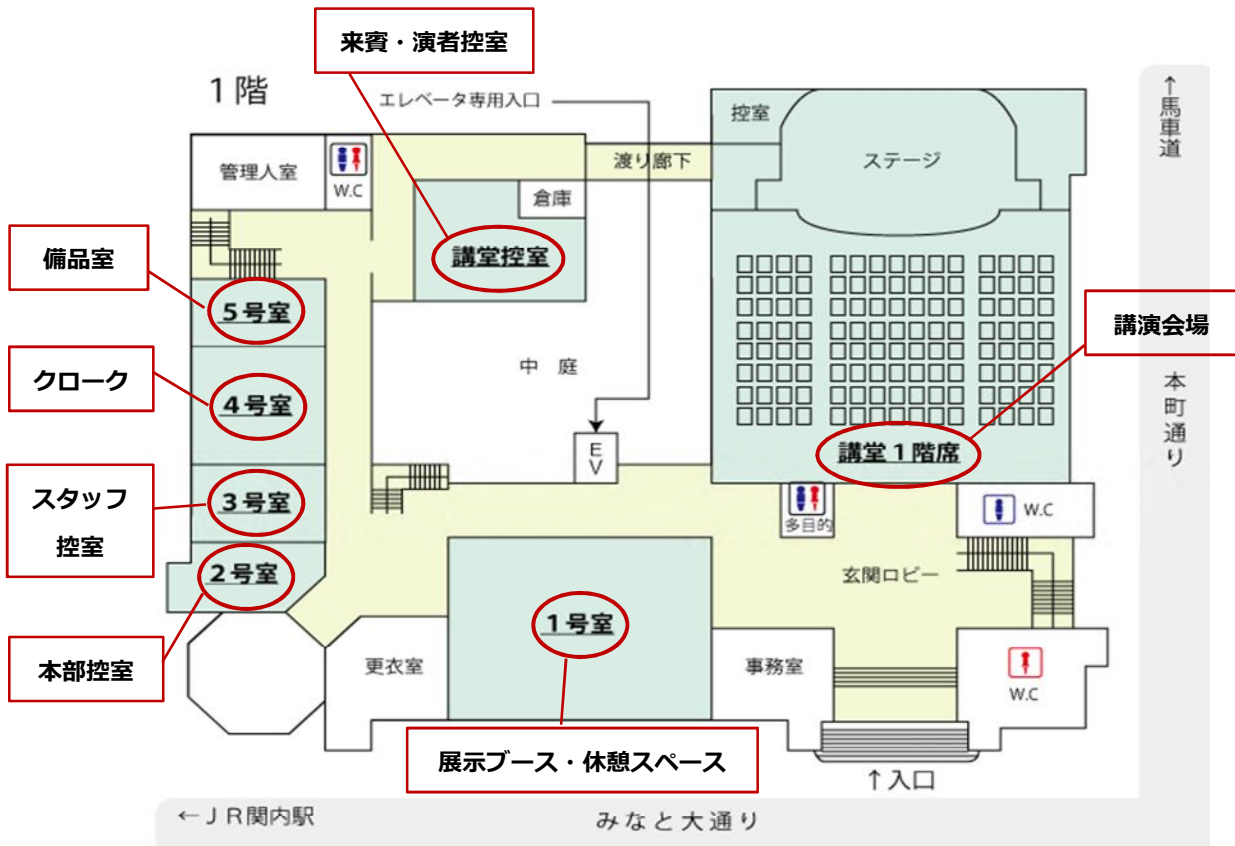
3. 示説掲示について

- (1) ポスター展示は 10 時～17 時となっております。9 時 30 分まで会場にポスター貼付をお願いいたします。掲示終了後は 17 時～17 時 10 分の間に撤去をお願いします。終了時刻になっても撤去されていないポスターは、事務局で処分させていただきます。
- (2) 掲示板の演題番号は事務局で準備いたします。画鋏やテープなどは各自でご準備をお願いします。

- (3) ポスターの掲示がない場合は、本大会では発表しなかったこととなりますのでご注意ください。

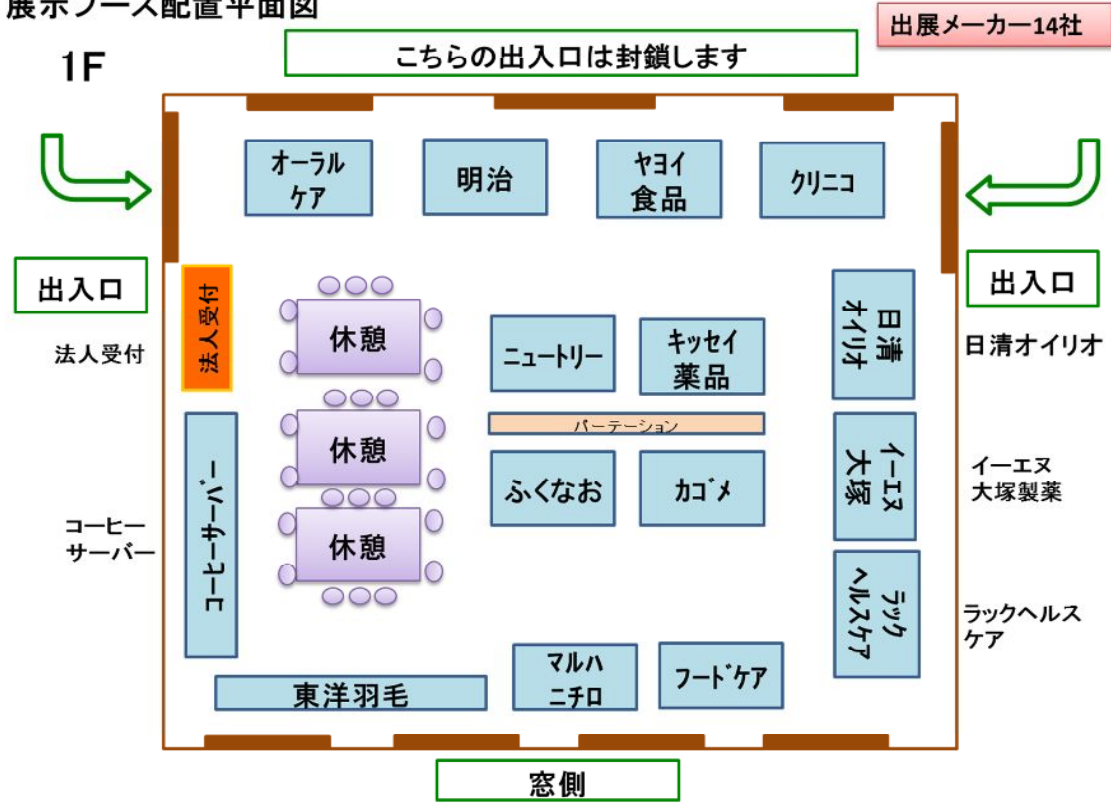


会場案内図

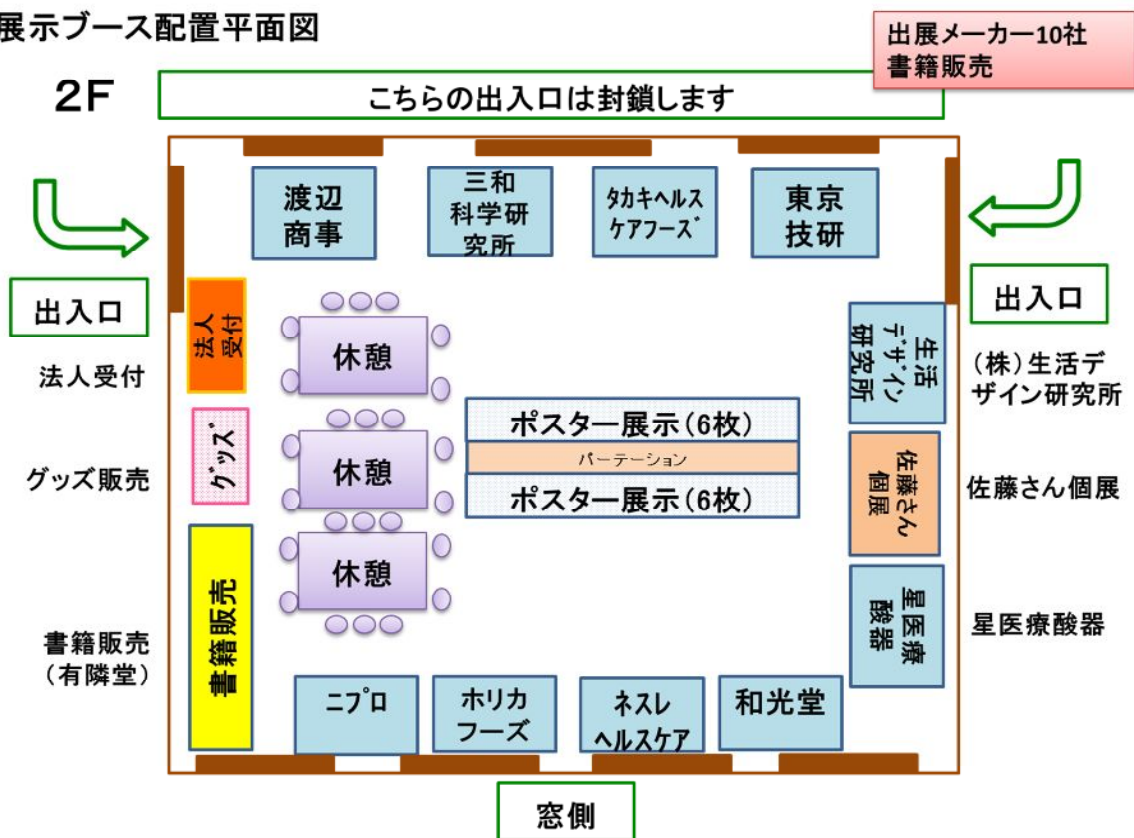


展示ブース会場

展示ブース配置平面図



展示ブース配置平面図



プログラム
第1日目 7月13日(土)

敬称略

午前の部

- 9:20 ~ 受付
- 9:50 ~ オリエンテーション
-
- 10:00 ~ 開会挨拶 安西秀聡 (イムス三芳総合病院 医師)
- 10:10 ~ 10:40 大会長基調講演
- テーマ: 口から食べたい願いが叶う高齢社会の実現を!
- 演者: 小山珠美 (東名厚木病院 看護師)
- 座長: 藤本篤士 (医療法人溪仁会 札幌西円山病院 歯科医師)
-
- 10:40 ~ 11:40 セッション1
- テーマ: 急性期・回復期・在宅をつなぐ医師、歯科医師からの提言
- 演者: 山下 巖 (東名厚木病院 医師)
- 横山信彦 (誠愛リハビリテーション病院 医師)
- 五島朋幸 (ふれあい歯科ごとう 歯科医師)
- 座長: 安西秀聡 (イムス三芳総合病院 医師)
-
- 11:40 ~ 12:40 セッション2
- テーマ: 口から食べられなかったときの苦しみ、
食べられるようになった幸せ
- 演者: 松尾治彦 (ご家族)
- 橋本和樹 (ベネッセスタイルケア ここち平塚 前ホーム長)
- 佐藤 貢・佐藤千恵 (当事者とご家族)
- 座長: 芳村直美 (東名厚木病院 看護師)
-
- 12:40 ~ 13:40 昼食・休憩

午後の部

13:40 ~ 14:00 「NPO 法人 口から食べる幸せを守る会」に関する説明

14:05 ~ 15:05 セッション3

テーマ：“口から食べたい”を地域で支える

—震災後からの気仙沼地区での取り組み—

演者：成田徳雄（気仙沼市立病院 医師）

小野寺裕子（特別養護老人ホーム恵潮苑 看護師）

一瀬浩隆（山谷歯科医院・東名厚木病院 歯科医師）

座長：古屋 聡（山梨市立牧丘病院 医師）

15:05 ~ 15:20 休憩

15:20 ~ 16:20 セッション4

口から食べることの大切さを未来へ継承していくために

演者：吉田貞夫（沖縄リハビリテーションセンター病院 医師）

嶋津さゆり（熊本リハビリテーション病院 管理栄養士）

中村悦子（市立輪島病院 看護師）

奥村圭子（在宅栄養支援の和・愛知 管理栄養士）

福村美紀子（ワールドトラストメディカル 栄養士）

座長：社本 博（沖縄県立八重山病院 医師）

16:30 閉会の挨拶：横山信彦（誠愛リハビリテーション病院 医師）

10:00 ~ 17:00 ポスター展示・企業展示・書籍販売・NPO 法人申込受付

関連グッズ販売



ポスター発表（掲示のみ）

- P 1. 嚥下障害患者の患者会
青山寿昭（愛知県がんセンター中央病院 看護師）
- P 2. 胃ろうの患者さんがもう一度口から食べるための入院リハビリテーション
横山信彦（誠愛リハビリテーション病院 医師）
- P 3. 栄養サポート室の役割～摂食・嚥下障害に焦点をあてた取り組み～
中村悦子（市立輪島病院 看護師）
- P 4. 本荘第一病院 NST、摂食・嚥下障害への取り組み（プロローグ編）
谷合久憲（本庄第一病院 医師）
- P 5. 「在宅栄養支援の和・愛知」の取り組み報告
洪 英在（国立長寿医療研究センター 医師）
- P 6. 「口から食べること」の支援に関するアンケート
田久浩志（国士舘大学大学院救急システム研究科 教授）
- P 7. 嚥下訓練により経口摂取可能となった重度半側空間無視を伴う 92 歳脳梗塞患者の一例
一瀬浩隆（山谷歯科医院・東名厚木病院 歯科医師）
- P 8. 摂食嚥下機能訓練にて胃ろう造設を回避できた症例
三村卓司（金田病院 医師）
- P 9. 地域で考える摂食嚥下リハビリテーション～石垣島での取り組み～
社本 博（沖縄県立八重山病院 医師）
- P 10. ご家族から寄せられた電話相談への食支援の対応とその一症例について
海老澤夏美（東名厚木病院 看護師）
- P 11. 急性期医療における高齢者肺炎患者に対する早期経口摂取開始の有用性について
－早期退院を目指す当院の取り組み－
山下 巖（東名厚木病院 医師）
- P 12. 「安全な食事に向けて」～恵風荘震災後の新たな取り組み－
斎藤紀子（気仙沼恵風荘 看護師）

第2日目 7月14日(日) 実技セミナー

● 実技セミナー開催趣旨

「口から食べる幸せを守る会」(KTSM)では、高齢者や摂食・嚥下障害者の口から食べたいという願いを実現するために、支援者の食事介助を中心とした技術力の向上を目指しています。今回の実技セミナーは、摂食評価スキル、安全な食事介助技術、マネジメント力を融合し、困難症例であっても経口摂取を進めるための評価およびスキルアップができる人材育成を図ることを目的として開催します。

- 第1回実技セミナー会場： 神奈川県立保健福祉大学 実習室
神奈川県横須賀市平成町 1-10-1

- 企画委員： 小山珠美・芳村直美（東名厚木病院 摂食嚥下療法部）
水戸優子・大石朋子（神奈川県立保健福祉大学）

- 参加対象者：摂食・嚥下障害者への摂食訓練や食事介助を現場で行っている実務者

● タイムスケジュール

9:00~9:20	受付
9:20~9:40	オリエンテーション
9:40~10:20	全体講義 覚醒不良・重度左側空間無視に対するアプローチを中心に
10:20~12:30	実技演習（第1部） 事前課題の事例に対する口腔ケアおよびベッドサイドスクリーニング評価
	実技演習（第2部） 食事介助技術のステップアップ

◆ 実技演習の構成と展開

- ・当日の演習効果を得るために、提示された事例に関連した事前学習を進める。
- ・4名程度のグループに分かれ実施。1ベッドごとにアドバイザーを1名配置予定。
- ・アドバイザーは東名厚木病院摂食嚥下療法部での実務者もしくは研修経験者

- 今後の実技セミナー実施予定：詳細は「口から食べる幸せを守る会」HPに掲載予定
H25年12月14日(土) 日本赤十字広島看護大学
H26年3月15日(土) 神奈川県立保健福祉大学



**口から食べたい願いが叶う
高齢社会の実現を！**

講演者

東名厚木病院 摂食嚥下療法部 部長

NPO 法人「口から食べる幸せを守る会」理事長

小山珠美

座長

札幌西円山病院 歯科診療部長

藤本 篤士



札幌西円山病院 歯科医師 藤本篤士

900人近くの入院患者の平均年齢が82歳という病院で20年近く歯科医療に携わっていると、いまだに歯科大学で学んだことだけでは対応できないことの多い臨床現場で頭を悩ますことも少なくありません。特にこのような現場で働き始めた頃には、「食べる」ことを目標としたときの歯科の非力さに打ちのめされるばかりでした。大学では歯が28本そろってれば、いい入れ歯を入れさえすれば、あたかも食べられることが当たり前であり、だから歯や歯槽骨など口腔器官を正常な形に治す技術教育がメインでした。しかし現場は全く違いました。歯が28本あって口から食べたいという思いがあったとしても、いい入れ歯があったとしても、食べられない人たちのなんと多いことか。食べるためには何が必要なのか、どうすればよいのかを悩み始めた15年前「NST: Nutrition Support Team」との出会いがありました。慢性期の病院としては日本で初めてNSTを立ち上げた際には初代のディレクターとなり、医師や看護師だけではなく、管理栄養士、ST、OT、PT、薬剤師、臨床検査技師など多くの職種が「食べる」ことに関わっており、また一つの症例に対する視点の多様さ、関わり方の多さに衝撃を受けたのを昨日のように覚えています。

それから「口腔ケア」を実践的な視点から見直し、「摂食嚥下」の必要性を感じて一から学び始め、リハビリテーションの重要性を感じた頃に「リハ栄養」に出会い、もう一度自分の専門である歯科を振り返ったときにPAPやPLPなどの「嚥下補助装置」の重要性を再認識してようやく非力な歯科にも光を感じることができました。

私が尊敬する小山珠美先生は、急性期の現場で学術的そして技術的にも一つの分野を確立された日本で唯一の医療者です。誰も成し遂げなかったこの新しい分野の確立には、筆舌に尽くしがたいものがあったでしょう。そして今も前に進んでいるのです。この小山先生の熱い思い、志に共感し賛同された皆さんとともに、しっかりとした未来への架け橋を、日本全国に広めようではありませんか。





東名厚木病院 看護師 小山珠美

私達はこの世に生を授かっていますが、その生命には限りがあります。誰もが程度の差こそあれ、年齢を積み重ねた老化を経ながら、生命輪廻の中で生かされています。だからこそ、限りある生命をより幸せに生き抜きたいと願っているのではないのでしょうか。

口から食べることは、私たちがこの世に誕生した瞬間から与えられた命の育みです。そして、人として幸福に生き続けるために欠かせない希望であり尊厳されるべき生命の源です。

昨今の栄養療法の普及によって多くの生命が救われ、幸せな生活をもたらしたことは喜ばしいことです。ただ、一方で「食べたい！」という、人としての細やかな幸せを奪ってきたようにも思います。つまりは、現況の医療や福祉の現場では、「生命の安全を重要視する」という名目で、口から食べることを禁止する医療や福祉での惨状が溢れるようになっていることです。特に高齢者は、誤嚥性肺炎を懸念するあまりに点滴や胃ろう栄養のみという方々が大勢いらっしゃいます。もしも、私が目の前の患者さんだったら、それで「幸せ」と思うのでしょうか？もしも、その人が、私の大事な家族だったら、きっと好きなものを食べさせてあげたいと切望すると思います。

私は、これまで、普通の看護師として当たり前の「食べてより良く生きられるような看護や教育をしたい」と願って実務や啓発活動を行ってきましたが、救いの手を求めている患者さんやご家族への支援がまだまだ足りないということを実感を感じるようになりました。これまでの普及・啓発活動に加えて、よりクオリティーの高い食支援ができる人材育成を図っていく必要があるという考えに至り「口から食べる幸せを守る会」を発足しました。

本大会でお集まりいただいたひとり一人の小さな力が、人と食を未来に繋ぐさらなる有機的なネットワーク構築を拡充し、「口から食べて幸せに暮らせる優しい社会」に変革できると信じています。本講演では、これまで出会ってきた患者さんやご家族の食べられるようになった喜びをご紹介します。私達がなすべき「高齢社会への挑む食支援」への道筋を再考したいと考えています。

**急性期・回復期・在宅をつなぐ
医師、歯科医師からの提言**

講演者

東名厚木病院 医師 山下 巖

誠愛リハビリテーション病院 医師 横山信彦

ふれあい歯科ごとう 歯科医師 五島朋幸

座長

イムス三芳総合病院 医師 安西秀聡





イムス三芳総合病院 医師 安西秀聡

一般内科・消化器内科医として患者さんの診察・治療をするなかで、食事を制限されてしまう方々と数多く接してきました。そのなかで病気が軽快し口から食物を摂れるようになった時の「美味しい」という言葉と、満面の笑みが私の「口から食べる」を推進する活動の原点です。

人間は残念ながら病気になり入院することもあります。しかし、「病気＝絶食」はあまりにも短絡的な思考の産物であり、未だに医療界ではこの考え方が大きく幅を利かせています。抵抗を試みても、「口から食べる」考え方の無い人々に阻まれ、もっと悪いことに内視鏡医でもあるため、大変不本意ですが他科からの依頼で「安易な」「口から食べる努力がなされていない方々への」「胃ろう造設」も数多く行わなくてははいけません。聞こえは良い「代替栄養療法」を選択しなくてはいけないというジレンマ、自己嫌悪を感じています。

現状の医療では、病状がさほど深刻でなくとも患者さんへの食事や行動に関する医師の制限が厳しすぎるように思われます。「口から食べる」という「希望」を叶えられるということは、患者さんの健康回復を手助けすることに加えて生き抜く気力や生き甲斐とう人生の質を高めることになると考えています。

このセッションでは、まさに病院を受診したその時点から、そしてリハビリの段階に至り、最終的に自宅へ戻ってからも「口から食べることは至極当たり前のことである」と考えている3人の先生方にご登壇いただきます。長年の経験とその成果を目に見える形でご呈示いただき、「口から食べる」を継続するためには医療者が何をなすべきかを討論していただくことになります。目から鱗が落ちることは間違いありません。一言も聞き逃さず、衝撃を受けて下さい。



急性期医療での早期経口摂取開始の必要性とその成果

東名厚木病院 医師 山下巖

口から食べることは人間にとって、より幸福に生きる源です。昨今の栄養療法の普及は多くの健康回復をもたらしてきましたが、その一方で、より生理的で人間の満足をもたらす“口から食べる”ことを軽視していないでしょうか？特に我が国における要介護高齢者の救急患者の急激な増加に伴い、入院治療終了後であっても、認知、ADL 低下で、長期入院となる例も増えつづけています。長期入院患者が増加すれば、空ベッドは減少し、結果として、地域の救急医療に大きな支障をきたすこととなります、

私は、高齢者救急医療の結果として重要なことは、早期より口から食べて幸せな生活を取り戻すことだと考えています。口から食べることで、患者は満足し、病状、QOL が改善し、結果として早期退院、転院が可能となるからです。当院では、高齢者救急患者に対して、入院当日に医師が摂食機能療法の指示をだし、摂食嚥下チームが介入を開始できるようにしています。口腔ケアおよび個々に応じた摂食嚥下機能を評価し、リハビリと協働しながら誤嚥性肺炎や窒息のリスクを念頭に段階的な食上げを行っていくようにしています。

平成 19 年度より 4 年間に摂食嚥下チームが介入した 1707 例中(死亡例は除く)、経口摂取での退院者は 1518 例(88.9%)で、入院から経口のみとなるまでの平均日数は 7.8 日でした。脳卒中では 693 例中 91.8%高齢者、肺炎は 434 例中 82.5%に経口退院が可能で、その内 85 歳以上の超高齢者においても、各々 80.2%(n=106),83.6%(n=159)と高率でした。

以上のことから高齢救急患者であっても、入院時より高い能力をもつ摂食嚥下チームが介入すれば、安全な早期経口摂取は可能であり、病状の改善、患者の満足、QOL の向上、入院期間の短縮、医療費高騰の削減につながると考えられました。

本セッションでは、急性期医療での早期経口摂取への取り組みとその成果について紹介します。



回復期リハビリからみた口から食べることの重要性
誠愛リハビリテーション病院 医師 横山信彦

高齢化社会を迎えて平成12年に介護保険制度が発足すると同時に「回復期リハビリテーション病棟」という新しい形の病棟が創設されました。これは脳卒中や大腿骨頸部骨折など、生活する能力を損なう疾患の患者さんを「寝たきりにしない」ことを目的として、多くの専門職がチーム医療を行っていく病棟です。私は脳外科医師として脳卒中の急性期医療に携わってきましたが、平成18年から縁あって脳卒中の回復期リハビリに携わるようになりました。そこで目にしたのは重症の脳卒中の方々、すなわち最も回復期リハビリを必要とする患者さん方が、不適切、不十分なリハビリによって、さらに苦しみの淵に沈んでいく姿でした。思い起こせば、こうした現状を「どげんかせんといかん！」と悲願を立てたことが、口から食べる幸せを守る会に名を連ねることに繋がっています。重症の脳卒中患者さんとは、詰まるところ「口から食べること」に障がいをもたらした方々です。こうした患者さんが家に帰るためには、①口から食べること、②トイレの感覚がわかること、③移動がある程度自立すること、の三つの条件が必要ですし、必ず、①→②→③の順番で患者さんは機能回復していきます。つまり、「口から食べなければリハビリは成立しない」といえまし、口から食べることで寝たきりを防ぐ」とも言うこともできます。「口から食べること」は単なる栄養摂取の手段ではなく、ひとが人間として生きていくために不可欠な能力であるといえます。超高齢化社会を迎えて、ひとと社会に優しい持続可能な医療を未来へ繋ぐためには、病気を力づくで押さえ込むだけでなく、ひとの内なる自然を信頼して治癒力を引き出していく医療へと大きく舵を切ることが必要だと考えます。今回のセッションでは、回復期リハビリの現場で「口から食べること」をなぜ私たちが大切と考えるか、そしてそれがなぜ未来の医療に必要であるか、自らの経験とデータを基に言及したいと思います。



最期まで口から食べられる街づくり
ふれあい歯科ごとう 歯科医師 五島朋幸

人間の口の機能はいくつかあります。食べること、話すこと、息をすること。いずれも人間が人間らしく生きるために必要不可欠な機能です。しかし、これまでの医療は口を大切にしてきたでしょうか。病気ばかりに目がいき、“ひからびた”口にしていなかったでしょうか。口を粗末にするということは生活を粗末にするということです。生活を軽んじた医療が人に優しい医療であるはずがありません。口を大切にする医療、ケアこそが日本の高齢社会に明るい光を照らすかもしれません。

口腔ケアとは単に口をきれいにすることではありません。なぜ口腔ケアによって誤嚥性肺炎が予防できるのか、なぜ口腔ケアによって食べられる人が出てくるのか。口腔ケアから始めて胃ろうを抜去した人もいます。口腔ケアをしたその瞬間から食べ始めた人もいます。口腔ケアの意義と価値を社会が認知することで「食べられる街」が実現するのではないのでしょうか。

私たちは2009年7月、東京都新宿区で「最期まで口から食べられる街、新宿」をモットーに新宿食支援研究会を結成しました。在宅療養者の「口から食べたい」という欲求を満たすためにチームで働きかけ、最期まで口から食べられる楽しみ、満足感を与えることが、重要な使命です。そのために、介護現場から専門職へと向かうネットワーク構築を目指しています。専門職のネットワークをいくら強固にしたところで、介護現場が、いや、社会が食の大切さに気付かなければニーズはありません。「口から食べる」ことの意味を社会に問うことこそ真の食支援と考えています。



**口から食べられなかったときの苦しみ
食べられるようになった幸せ**

講演者

ご家族 松尾治彦
ベネッセスタイルケアこち平塚 前ホーム長
橋本和樹
当事者のご家族 佐藤貢・佐藤千恵

座長

東名厚木病院 看護師 芳村直美



東名厚木病院 看護師 芳村直美

セッション2では、「口から食べられなかったときの苦しみ、食べられるようになった幸せ」とのテーマで、当事者の方、そのご家族、支えてくださっている福祉施設関係者の方からの話を拝聴いたします。

私たち口から食べる幸せを守る会は、“すべての人が口から食べて幸せに生きる社会”の実現を目指し、このように横浜に集うこととなりました。このような活動の原動力（考えるきっかけ）を私たちに与えてくださったのは、これまで臨床で出会った摂食・嚥下障害の患者さんご家族でした。「もう一度食べられるようになりたい！」と願う方々は、私たちの病院も含めて、日本中に数多くいらっしゃいます。その方々の代表として、本セッションでは、苦難を経験したご本人とご家族に登壇していただき、実話を語って頂きます。また、福祉施設関係者の方からは、食べることを支えていくための取り組みや考え方をお伝えして頂きます。

「食べられない」と判断したことが、当事者の一生を左右してしまうという厳しい現実を私たちは知っておかなければなりません。そして、口から食べることが、どれほどまでに人を幸せにするかということを真摯に理解しておく必要があります。

私たちは「食べる」を大切にする専門職でありたいと日ごろから思っています。だからこそ、当事者の方々のメッセージは、私たちの明日からの道標となり、本大会の参加者全員がアクションを起こすきっかけとなりえるはずです。

口から食べたいと願う人々の思いに寄り添い、食べることを叶えるために、当事者、ご家族とともに取り組んでいける保健・医療・福祉社会の実現を目指していきましょう。

